

我は復活なり。
生命なり。
我を信する者は、
死ぬとも生きん。

聖書の光

みことばは天にてとこしえに定まり

CONTENTS

・復活節特集
・死とは何か？
・救いの証言

2021.3
春号
No.146

わたしの値打ち、神さまの評価は？

美濃ミッシヨン代表 石黒イサク

もつと良いモノを、少しでも速く、少しでも高く…と成長・進歩しているはずの世界なのに、科学が解明できない災害が起こり、医学でも対抗できない伝染病が蔓延すると、私たちは人間の限界を痛感させられます。人間の価値は？ 人生の目的は？ 自己の値打ちは？ いま一度問いかけて、考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

社会の流れ

生活の安定のために、「みんなと同じように」「流行に遅れないように」と考えたり、幸福を求める努力は悪い事ではないでしょう。しかし私たちの社会では、数で押し切られたり、少数・弱者が無視されたりしてはいませんか。個人の権利・価値がいつも尊重される環境になっているでしょうか。

競争社会では賢い者、強い者、権力や資金を持っている者たちが幅をきかせ、少数派や弱者は切り捨てられてしまいます。有能・優秀な者たちは優遇され、凡人や無能な者・愚かな者は嫌われたり、無視されたりします。平等でみんなが住みやすい社会は、夢・理想でしかないように感じます。

周囲の評価

「私には…がある」「私は…できる」



しみや嫉みを抱き、神様に対しても恨みや怒りを持ってしまふ人たちもあるでしょう。さらに悲観・失望のあまり、自らの命を絶つてしまふ人まであるのは、実に気の毒で悲しいことです。

神さまの評価

雪の結晶は一つ一つ違い、人間の指紋や声紋もみんな別々です。私たちは一人一人が、それだけ特別に緻密に創造され、形作られ、愛されている存在なのです。つまり神様の御前には、ダメ人間は誰一人も無く、落ちこぼれも無視される人もありません。

『我窮なき愛をもて汝を愛せり。故にわれ絶えず汝を恵むなり。』（エレミヤ記三一・3）と神様は呼びかけておられます。ですから救い主を与えて、私たちを罪とその結果の永遠の滅亡から救い出してくださる御方なのです。

神さまの招き

創造主の真の神様は、『一羽のスズメでさえも』守り支え、『虐げられる者のために審判を行い』、私たちを愛と正義によって取り扱ってくださる御方です。どれだけ小さく、弱く、愚かであっても、神様を求めて近づく人は、救いをいただくことができます。

『我に來たる者は、我これを退けず』（ヨハネ六・37）と、イエス様は大切なあなたを愛して招いておられます。

燭台



人はみな苦難と共に生きている。連日報じられる被害者数、死亡者数。それぞれの人生の悲哀・苦悩は数字には表れないもの。為政者が誇る経済指標や株価が上昇しても、民衆の平和や安泰は手に入るものではない。◇古来、武力や権力で他者を圧倒し、多くの人の血を流し、屍を踏みこえて周囲を制圧した者たちが英雄と崇められているが、果たしてそうだろうか。その国はどれだけ存続したのだろうか。◇主イエスが治める「神の国」は、愛によって建てられた真の平和の国である。その王様は国民のために、自らの命を与えられたのだ。◇主イエス・キリスト様の十字架は、その愛を明確に表している。『汝は屠られ、その血をもて諸種の族・国語・民・国の中より、人々を神のために買い』この御方を主と仰ぐ人は、本当に幸いである。

復活節特集

復活節と行事について



主イエス・キリスト様の復活記念日を祝うことは、初代教会の時代から行われていました。十字架がユダヤ暦ニサンの月14日でしたから、その三日目が復活日となります。

復活節の日

世界中で祝われる降誕節「クリスマス」は、12月25日に固定されていますが、復活節は毎年移動します。それは太陽暦と太陽暦の差によって生じるものです。主イエス・キリスト様は過越の祭りの時に十字架にかかり、三日目に復活されましたので、過越の次の日曜日が復活日になります。現在は太陽暦で世界がほぼ統一されていますので、春分の日の後に来る最初の満月の次の日曜日が復活節となります。(教派によって基準日の違い、多少のずれが生じます)

復活節の特徴と意味

新約聖書が書かれたギリシャ語では「パスカ」と呼びますが、それはヘブル語で「過

越」を現す「ペサハ」から来ていて、主イエス・キリスト様の十字架は、過越の祭りの成就であったことを示しています。『…われらの過越の羔羊、即ちキリスト既に屠られ給えり。』(コリント前書五・7) イスラエル民族は、出エジプトを記念する「過越の祭り」を春の例祭として祝ってきました。

しかし復活祭を表す英語「イースター(Easter)」およびドイツ語「オースターン(Ostern)」は、なんとゲルマン神話の春の女神「エオストレ(Eostre)」の名前で、女神の祭りの呼称でもあります。ゲルマン人は春の月名を「エオストレモナト(Eostrenonat)」と呼び、春の到来を祝う祭りを行っていました。つまり異教の春祭りと、主イエス様の復活の祝いが習合して、そのような呼び方になってしまったのです。キリスト者にとって最も大切な復活日の祝いを、異教の女神の名で呼び続けることなど、看過できないことです。復活節という呼称を保持したいものです。

諸習慣の内容

復活節前の四週間をレント「四旬節」、あるいは大斎節(たさいせつ)と呼び、イエス様の荒野の試練や受難を記念する期間としています。正教会では、大斎(おおものいみ)として六



週間をあてています。

復活節までの一週間は「受難週」と呼ばれ、教会暦の中で非常に重要な位置を占めています。復活日一週間前の日曜日は、イエス様がロバの子に乗ってエルサレムの町に入られたことを記念する、「棕櫚の主日」と呼ばれます。(マタイ二・11、ルカ一九・29、46など参照)

イースター・エッグ

これは広く東西ヨーロッパで用いられています。復活祭に出される、彩色や装飾を施されたゆで卵で、配布されたり、子どもたちがそれを探したりして遊びます。ただしこれも聖書の根拠は無く、春の女神の象徴だった卵に、「見た目は動かない卵から命が生まれるから、復活の象徴で、赤色の装飾はイエス様の血の色だ」と取って付けたような説明をしています。

古代から世界各地で春分の日頃に、春の息吹を祝う祭りが行われています。自然界が死と復活をくり返しているという思想からのものです。しかしこれは、一度だけ人類の救いのために命を与え、死に勝利して復活された主イエス様を表すものとしては、不適切です。



イースター・バニー

これはまた女神の化身で、ウサギは多産であるから、豊穡の神の象徴として用いられた偶像ですので、大切な記念日に偶像を持ち込むことは許容すべきではありません。これもイエス様の復活とは無関係なもので、排除すべきものであります。

イースター・リリイ

『われはシャロンの野花、谷の百合花なり。』(雅歌二・1) から、主イエス様を「谷間の百合」と呼ぶことから、白ユリをイエス様の象徴として、特にこの季節に好んで用いている人々もありますが、谷間のユリとは、実は「スズラン」のことでありますので、少し間違っています。

『キリスト聖書に於いて、我らの罪のために死に、また葬られ、聖書に於いて三日目に甦り。』(コリント前書一五・3、4)

復活節の諸行事や食べ物などが、キリスト教の習慣として日本に入ってきています。しかしクリスマスやサンタクロースなどと同様に、商売と欧米の異教・因習が混合されてしまったところもたくさんあります。私たちは聖書に基づいて、守るべきものを守り、警戒すること、排除すべきものは何であるかを見極める必要があります。



死とは何か？

生あるものは必ず死にます。“恐怖の王”と呼ばれて恐れられ、嫌がられている“死”ですが、すべての人が絶対に避けて通れない、人類にとって最大の敵・最重要問題であります。医学的な死の特定や、法律的扱いではなくて、聖書が示す“死”について調べてみましょう。聖書は、死とは「いのちから切り離されること“分離”」であると教えています。普通では死とは、肉体的死を指しますが、聖書は明確に、霊的死、肉体的死、第二の死の三つの死があり、それぞれがつながっていることを説いています。

霊的な死＝神との分離

『善悪を知るの樹は、汝その果を食らうべからず、汝之を食らう日には、必ず死ぬべければなり』（創世記 2:17）と神さまはハッキリと警告されましたが、人類の始祖アダムが、創造主である神様に背いた時に、神さまから切り離される“霊的死”の状態になりました。

アダムはそれから約 900 年も生きて、多くの子孫を残しましたが、人類は命の源である神さまとの交わりが断たれた状態＝罪人となってしまいました。それはすべての人に共通で、霊的に死んでいる者は、やがて必ず肉体的な死を迎えます。

『それ一人の人によりて罪は世に入り、また罪によりて死は世に入り、』（ロマ書 5:12）



肉体的死＝肉体と靈魂の分離



人間は“霊”と“心”と“体”の三つでできています。私たちの身体は土の塵から造られていますので、死ぬ時に土に戻り、内面にある“霊”と“心＝魂”は肉体から分離し、靈魂は死者の行き先である陰府に行きます。これが“第一の死”です。靈魂は永遠の存在で、人生は一度限り、輪廻転生も幽霊もありません。

『凡ての人罪を犯しし故に、死は凡ての人に及べり。』（ロマ書 5:12）
『一度死ぬることと、死にてのち審判を受くることとの人に定まり』（ヘブル書 9:27）

第二の死＝神との永遠の分離

陰府に入れられていた靈魂は、世の終わりに正義の神様の御前で、一生の罪を裁かれます。そして永遠の刑罰に入れられて、神さまから永遠に分離されることを“第二の死”と呼びます。ここに入ったら最後、永遠に出ることはできません。地獄とも呼ばれる第二の死は、悪魔とその手下たちのために設けられた所でしたが、救いを受けとらなかった罪人たちも、そこに行くこととなります。主イエス様の十字架の死は、私たちが罪の赦しをいただいて、絶対にそこに行かないためでありました。

『此の火の池は第二の死なり。すべて生命の書に記されぬ者は、みな火の池に投げ入れられ』（黙示録 20・14-15）

死と死後の世界も事実・真実ですから、一人一人が絶対に対応しなければならない、人生の最重要課題です。主イエス様は『人、全世界を儲くとも、己が生命を損せば何の益あらん。…その生命の代に何を与えんや。』（マタイ 16:26）とお語りになり、この世の成功以上に、救いの重要性をお示しになりました。救いを受ける時に、私たちの霊は生かされ、神さまとの交わりが回復されます。永遠のいのちとは、二度と神さまと切り離されることの無い状態で、永続します。

『罪の払う値は死なり。然れど神の賜物は、我らの主キリスト・イエスにありて受くる永遠の生命なり。』（ロマ書 6:23）

救いの証言

まんよし てつじ
萬好 徹治

不平から感謝へ



初めて教会に行った時、私に無くて教会の人たちにあつたものは、感謝する心だつたと思います。

当時の私は何をするにも自信がなく、不安と劣等感に生きていました。友人に付けられたあだ名は、「いじけ豆」で私の性格をよく見抜いたものでした。

さて、教会の人たちはいつも、まるで口癖のように「感謝します。神様。」と言っていました。私にはそれが不思議でなりませんでした。

彼らは、何か特別な才能を持っているわけでも、お金持ちや有名人でもなく普通の人でした。この人々と私の違いは、一体どこからくるのか知りたくて、私はその後も時々教会に行くようになりました。自分に自信のない私は教会でも、できるだけ目立たない席を探



徳島聖書バプテスト教会

して座っていました。牧師先生のお話はよく分からず、自分の罪やキリストの死が私のためだと言われても、自分に関係のあることとして受け止めることはありませんでした。小豆島の田舎で寺に囲まれて育った私にとって、目の前にいない神様に向かって、真剣に祈る人たちも不思議でした。

教会に通って半年ほど経った9月26日の朝、一人の男性が集会の初めにこう祈りました。「神様、今この中にまだ救われていない人がいるので、今日救って下さい」。その瞬間私は、それは自分のことで、このままでは自分の罪のために地獄に行っても文句の言えない、救われるべき人間は私だと気付きました。そしてその日は、イエスキリスト様を自分の罪からの救い主として、信じる祈りをする事ができました。

教会の人たちがいつも「感謝します。神様。」と言うことができたのは、毎日何か良いことあつたからではなく、神様を見上げていたからだだと徐々に分かってきました。苦しいことがある度にいじけていた私は、自分だけを見て、自分を基準に物事に向き合っていたことに気付いたのです。その後私は、海

へ行けば、私が食べるたこ焼きのためにタコを育て、畑のそばを通る時には、私が食べるお好み焼きのためにキャベツを育てて下さっている神様に感謝するように心が変えられました。

大切なのは素直にイエス様を信じて、今神様が私に与えられているものに感謝することでした。私はそういうことの積み重ねが、「感謝します。」という口癖を生むのだと思えるようになりました。この四十年を振り返ると、イエス様を自分の神様として信じられたことは、人生で一番素晴らしいことでした。私を変えて下さったイエス様と、このお方を紹介して下さった人に心から感謝しています。

『言い盡しがたき神の賜物（たまもの）につきて感謝す。』（コリント後書九・15）

（筆者は徳島聖書バプテスト教会牧師）

私たちの教会は、エホバの証人、モルモン教、統一協会ではありません。これらでお悩みの方・質問のある方はお気軽にご連絡ください。

ユース・メルマガ配信中 youth-mail.eccl.12-1@softbank.ne.jp

美濃ミッションホームページ <http://www.cty-net.ne.jp/~mmi/>

あこがき

今回は徳島

で活躍中の

萬好先生に

救いの証言

を書いていただきました。

各方面から、い

ろいろな反響をお寄

せいただき感謝いたし

ます。続いて一人でも

多くの方々に、救い主

イエス様の愛と恵み、

聖書の素晴らしさを

お伝えしてまいりま

す。皆様のご祈援を

よろしくお願いいたし

ます。ホームページ、

美濃ミッションチャ

ネルもどうぞご覧く

ださい。（I）

